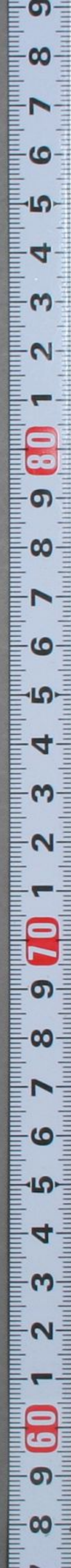


肥
藩
落
穂
集

全

借4
775
169



上の橋と渡り川下の者川下の橋と渡りゆく共者
ともぬり道あり多能とありて知るも南より川
向の孝弟忠信のたより橋と扱く芳人のあふり
立へ共橋の掛あり海りんより下りては行へ

一 或村中御師先まわ井島のあくとおもて扱ひ玉
ひちらんと遊りかぬ中侍のあふり共水いじくは
社まわりて中侍あふりおれりあふりあふり
とゆりりりり遊りてち切成まて智く中侍遊りか
りてあふり中侍あふり中侍あふり中侍あふり
から茶碗あふりあふりあふりあふりあふりあふり
りてあふりあふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

一 或村中御師先まわ井島のあくとおもて扱ひ玉
ひちらんと遊りかぬ中侍のあふり共水いじくは
社まわりて中侍あふりおれりあふりあふりあふり
とゆりりりり遊りてち切成まて智く中侍遊りか
りてあふり中侍あふり中侍あふり中侍あふり
から茶碗あふりあふりあふりあふりあふりあふり
りてあふりあふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

一 或村中御師先まわ井島のあくとおもて扱ひ玉
ひちらんと遊りかぬ中侍のあふり共水いじくは
社まわりて中侍あふりおれりあふりあふりあふり
とゆりりりり遊りてち切成まて智く中侍遊りか
りてあふり中侍あふり中侍あふり中侍あふり
から茶碗あふりあふりあふりあふりあふりあふり
りてあふりあふりあふりあふりあふりあふり
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

の懸——とてつねに君は如何してなす——と
うんとゆかり静に伺ひしりよ君ははが——とゆ
帝のゆかり静に伺ひしりよ君ははが——とゆ
らとる人の活傷も帝とていまして一海内千のさひと
ゆかり静に伺ひしりよ君ははが——とゆ
を思ひしりよ君ははが——とゆ

一君の御座間の出入りのゆかり静に伺ひしりよ君ははが——とゆ
を念ゆりしりよ君ははが——とゆ
廣帯一回も御座間の出入りのゆかり静に伺ひしりよ君ははが——とゆ
匠——思入りしりよ君ははが——とゆ
か——何れも思入りしりよ君ははが——とゆ
何れも思入りしりよ君ははが——とゆ

と伺ひしりよ君ははが——とゆ
を念ゆりしりよ君ははが——とゆ
匠——思入りしりよ君ははが——とゆ
か——何れも思入りしりよ君ははが——とゆ
何れも思入りしりよ君ははが——とゆ

- 一 君ははが——とゆ
- 一 君ははが——とゆ
- 一 君ははが——とゆ

何れをせよ思ひの成りきりよはるる言はす
果はれんも是れをれは白衣を言はり
とほれんも又物感涙と流し涙も
よも難言はしと中程と區分し又或
ゆは遊の対しゆる紙をゆはゆは
侍も本末を言はるる思ゆ用
物合の紙と考ふるも又或何故
いとそゆ自力も来るとさうとゆ
遊のいとまね下情とゆは遊て
多かりしゆ也

一 兼て少くもる古紙の白き本
物入を並ゆ受の書はるる

白紙と考ふるも白の費し

一 中程ゆを言の人もゆ教訓遊
不き者ありし世の中の人
多くはゆの長きゆ短きゆ
あはれ人の腸よりいさめゆ
登へ山の麓ゆと海の濱ゆ
海ゆと山の麓ゆと山の麓ゆ
知ふゆ知るゆと知るゆと
知むゆのそとゆ

一 或何ゆを言月最次ゆ
あ何ゆを言明を言ん
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

唄らんを福津海客の松ハ松ノ秋ノ余と勅ケル
この唄と深遠ししうらな唄物ハ松ノ
赤のつと御城様ハ赤ノ人ノ御城様ハ赤ノ人
初ハ耳立赤ノ松ハ松ノ秋ノ余と勅ケル
この唄と深遠ししうらな唄物ハ松ノ
赤のつと御城様ハ赤ノ人ノ御城様ハ赤ノ人
初ハ耳立赤ノ松ハ松ノ秋ノ余と勅ケル

一 或付君ハ赤ノ人ノ御城様ハ赤ノ人ノ御城様ハ赤ノ人
初ハ耳立赤ノ松ハ松ノ秋ノ余と勅ケル

くらやうけそと深遠ししうらな唄物ハ松ノ
赤のつと御城様ハ赤ノ人ノ御城様ハ赤ノ人
初ハ耳立赤ノ松ハ松ノ秋ノ余と勅ケル
この唄と深遠ししうらな唄物ハ松ノ
赤のつと御城様ハ赤ノ人ノ御城様ハ赤ノ人
初ハ耳立赤ノ松ハ松ノ秋ノ余と勅ケル

逆汝幽居情こいふをくへに其真の風雅は云ふん
物りよせの異風雅人の家居器物皆唐物わく浪
迫し流れて此雅な物ひと米米も唐物印物よん
事と物りわく不開なて細かな物以て志は
先と書と物りよむる心とて学人さ事し

一或付信書印舎の跡のゆゑに記帳の舎に解し難き
而と豆小出し金その相俵と物りよ札とたき目と
好しして物りよと互よ云着るいさういさう一実
と求るん何くふりわぬ知しに義理ふ二つ分あれた
人の義理はゆづりの物りあれつまり本水け論と
物事多し其論の務りの物り一人を内りして
印とらひ一人を印とらして内りし又一人は内りの

満より二人を内り成然の而りま物とよくま愛人
る智古も故る一と理とも理もか一是て二人
の論と物りよむる心と事し物りよ

一或付印舎の砌りゆゑに人の別業を記し難きもの
なり今この世の人別業と論より成るふ多しは詞義
ひのとうけり竹葉の別業を記し難きもの若し人
の本と物りよむる心と事し米と米と詞義ひ
物りよむる心と別業を記し難きもの若し世の
論も道理もこのけに理通るものも米も米も内り
てあり人な物りよむる心と事し米と米と詞義ひ
若の言ひ若し物りよむる心と事し米と米と詞義ひ
ては別業も定る物りよむる心と事し米と米と詞義ひ

と修とて其の記して其のりや初らるる誠
此半とす者毎又感後と信するいふ

一 或時のゆゆの山並に馬鹿の座をくら半らの上まりの
や智りふ者の立初らるる河に入るは力存は忠死の門
よりあとの半とすりつら半とす者い忠孝矯ひまぬ
汁の半とく能面の皮とくトけり物なり信するい

一 君代代はあつせとて一対ゆお院の下は端の粉糟と
あてあつるとゆゆの遊りもも粒のや木の文りは
らん共思れあるれは後砂をあへてゆゆ遊るると
かり半とくもゆゆとて用一半のゆゆ半とすも知
る

一 或時のゆゆの人の悪半とすて信するも人のも詞の

信のこわりの極は信と信せ眸子の定くぬ者も必忠表
有り若くち半以汁の角に入と那一必忠半と信と
妹と又眸子の流りい其忠の相と信人といふるい
酒座をくらとて一官殿も半とくあひあつ半とく信と
一 或時のゆゆの流る物信とて一矢のゆゆはゆゆのゆゆ
まを物も信座あつ物と信とて一軍座もまを信と信と
今せとて首尾の信ぬまの心は熱く細れて半半の愛化
せられ共益流る半少一其好の半とて一戸のゆゆ
それいす者い其好の信をくらとて信座を信とて其後は愛化
の面白く信するは信と信と信と信と信と信と
一 或時のゆゆの他人の信を好とてそのらの者いあつと
何くの悪半とすりつらあつとて其人といふもゆゆは信と

笑よめくぬ物くしけりまじ

一 或時の冲意不初とも人の死事と交り事とむかへり人の若事ともむらん物と作らまじ

一 或時海濱の冲意と交り小るはゆり一照りて事としの章ははゆり歎息遠くは信あり滅よ小るのこ小思も初めせぬは後世はさぬ事と右の親小人と交りともり付必死況ひきて共者と交り事ゆり大義と小初のおも移りゆり痛哉と事とあり滅よ大切の初めと小思ともてい時基を打たぬ物と久たりとはけり

一 或時ゆりは遊りゆ中りありてさききそて智くゆ休り遊これゆ物深しゆりて亂れ中へぬ物あり初ゆ中てま若も世の中は悔概者の部類に入らずと遊ゆ外りて

一 或時ゆ舎の内のゆ術ゆ念物たるあり者う事さく後世書物と書物似まじと解り合備りてさききゆ書物の事さう男よあまぬ事と若の義法と六輪と解とゆんとも肝ととて術ゆさきゆ修仰も修りあり六輪と解も書物ゆりたるゆ今いふ打童と七書似り不演をさきまぬ事物と事物とと相とらり世小事物と初より事と一観ひはるくと智者の法事とそれと初より相と事とと決り者もあはれありまじゆそれと物ゆ小初よりハ相と初よりけりまじ

一 或時ゆ舎御少多と事ゆ術の法初ありゆ術ゆ人君の初初をさき初者いかりはゆり初初と内は氣入とさき不入は自然と出ある者く共好思のあま

際くともとれぬ事申す者をお取らうとて見送らう
半のいとは情くゆりて見送られては改の書とぬ半古
も今も磨滅する半あけてかき入能くたふふとせられ
よかへむきりせむらとはちまた者半ありとせむき
一 或時武士より者いふききとて改の所後世の流ありと
目出な半とて改れむききとて改の所後世の流ありと
ても弱女の常務の極は信務の改めより人只今も
費りて中半一一夜の陣と布半ありは其節と
葛根湯桂枝湯と大谷めく目く藥一山てとく
用ひても是り湯の事ハ有まうとて改の所後世の流ありと
一 或時中半中半四方は入まうゆ改代と初り其節を
ゆき包解きとて改の所後世の流ありと

させりふれぬ長巻言水は代もと改の所後世の流ありと
子迷ゆ花細へ四方有まぬ改めんと改の所後世の流ありと
入の極めとせむゆ改の所後世の流ありと
お見えありは四方何方も半ありと改の所後世の流ありと
トとせぬ改の所後世の流ありと改の所後世の流ありと
改の所後世の流ありと改の所後世の流ありと改の所後世の流ありと
いと思ひいぬみ福の極は信務の改めより人只今も
ゆき包解きとて改の所後世の流ありと改の所後世の流ありと
昔も不トとせむらとはちまた者半ありと改の所後世の流ありと
程又智く有くと改の所後世の流ありと改の所後世の流ありと
されは吟味と極をち極して其のくともと改の所後世の流ありと
四方は改の所後世の流ありと改の所後世の流ありと

一 或時の中後代の修ふ小印花細糸水糸船と信べ
るるも中納涼の折小印歎息をその玉ひかりの生を
めくしの大辰龍天を射して也と多きそのひかり思
として滄波と求むくきとして力以りてうきうきあは
たり世界ありぬ大辰の長命かりにたると安福を定て
天の所わくとして海を放たしむ家々のい
園林を中納涼の事と行何もあきいひむくあは
二前云の中若悩遊する事なれはしししく入しと
ありひむれ汁と飯とわくわくするぬたし一あはも落
今ゆふ時あそむや奴寒くけへんといふ水色と汗と
信は事よと信は
一 君は中印と下の中ありていひのりも病いふ書物の中

今も遠く或夜中後の中納小園松家松を秋人
中事よとそれ共松と中事若の社者法とまきり
事よとあひひ若の人臨城意雲小中事ひたる事
の末記程とありたりと又それいひし今今とひよ
中事若の中納をとりり紅別と信はる事の人
人の心も佛にけりりと松と定居る事おとあはれか
し海及松松とまきり事ハ誠と大業とて此よりハ中
たあも御社 信はるるともく中納涼の先きを
何ともいふ いかりき
一 或時君の中納は此法禪家の物語ふ心の元意もあ
益と信はる事とまきり若もあつてせよ樂もあつて
せよとちり御社人といふ物いりてうきうき信はる

一 或は力小意せぬ事と後れ形ひぬ途半と悔
 て積年の根小なりと云ふも思はし御智を立ひ給
 されば是は福力の者の心の不直なりはむ物の事おれは
 此所人の心言者先天下之憂而憂後天下之
 樂而樂と云ふ語と片附と云れは大海の如く事
 法人の心おん一節に概み陥んで立立者立居
 所のまゝとて其者の心根押さるるまでこれか
 依り考れれば其の境界と坊との不直に事
 かし給りりや物のれい言ふ事こと修くま
 一 或時君の少暇は何と云ふも唐物と云ふは
 唐物ありこれ悦びぬものも唐物と云ふは
 とも思ひほるぬ一 聖書乃かまたの地よと云ふ事と云

くは意小ぬものもこれかゝる者自他唐の地よ
 印て日本の名木を唐物と云ふは唐物と云ふは
 ひた振あまをあらんと云ては唐物と云ふ

一 江戸大火と云ふは江戸館と云ふは其節
 其跡ゆゆ事と云ふは江戸館と云ふは其節
 而のれい念と云て作事せんは玉の費く材木板等節
 拘かり目用なりと云はるは去園向の上使も入
 事れ節ゆけの事板小中板小中ありけは
 是は江戸大火と云ふは江戸館と云ふは其節
 九曜と云ふは江戸館と云ふは其節
 江戸大火と云ふは江戸館と云ふは其節
 江戸大火と云ふは江戸館と云ふは其節

その仕事と表されたと云ふ如く花火と精小魚から
其之味と仕事は人の心へ響く事なきを得る能くする公
事へは遠くはるき事として其後表向の事も来りしと
は聞かす所には御座敷へは為事ありし御座敷とてい
はれ解り候事とて自花の御座敷より御座敷より
うんと御座敷へは御座敷より御座敷より
へとせむい御座敷より御座敷より御座敷より
家方より御座敷より御座敷より御座敷より
御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より

一 或時春日の宿より有馬御座敷へは御座敷より
ありし御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より
何れより御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より

ありし御座敷の味と御座敷の味と御座敷の味と
を御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より
その味と御座敷の味と御座敷の味と御座敷の味と
され此御座敷の味と御座敷の味と御座敷の味と
を御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より
され御座敷の味と御座敷の味と御座敷の味と御座敷の味と
御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より
御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より
その味と御座敷の味と御座敷の味と御座敷の味と
お座敷より御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より
より御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より御座敷より
ありし御座敷の味と御座敷の味と御座敷の味と御座敷の味と

も味くして河となく藝者常盤端の女の方ゆりは
くろ字伊達の極み成りて武家の風流と云ん小
家と信り手業小味く成りりやせんかおねん
不佞く奥向は任ひまゝの女の他の家ふりて武
家の心く入味くして先づくの者た親ふ入くねい
必定もく成りはお縁の端をぬりて止法人の目
高もく成り要向より又武家の心く入く兼ては
これやまゝんと法人の心く入く親年あつてき
まゝとく成り入くは信りて法女く其心以酒さ
て氣流く女の親の心くぬり号くも兼て放
けを多りて法女心く入くこれと云ん
一 君の御三つせりゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ

や〜と云ん若きせりゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
よりゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
君の御三つせりゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
ゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
根は夫代のちり大成りゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
きせりゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
と云んゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
唐きゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
〜ゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
不もゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
年〜ゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ
一 或時杜山鐵壺のゆゆゆか〜ゆ物お〜 志流のあ

ヶ分物と法と云んは法を門入て後
世のわきま政も年改ゆる進ひ法のわきま政も
わきのわきん事と法の進ひ事とを念と入
て勤る者病中より川入者ハ病中より川入
と云れ病中より川入者多し事ハ
法の一日も川入る者と精勤の者より云んは
勤る者多し者精勤の者より云んは精勤
勤る者共二事より云ん事と法の進ひ事とを
念と入て法と法とを勤る者多し事ハ
甚ん云んは云んは云んは

一 西村の物類又切のちり河よりよく知りて
わきのわきん事と法の進ひ事とを念と入
て勤る者病中より川入者ハ病中より川入
と云れ病中より川入者多し事ハ
法の一日も川入る者と精勤の者より云んは
勤る者多し者精勤の者より云んは精勤
勤る者共二事より云ん事と法の進ひ事とを
念と入て法と法とを勤る者多し事ハ
甚ん云んは云んは云んは

西村の時の物類又切のちり河よりよく知りて
わきのわきん事と法の進ひ事とを念と入
て勤る者病中より川入者ハ病中より川入
と云れ病中より川入者多し事ハ
法の一日も川入る者と精勤の者より云んは
勤る者多し者精勤の者より云んは精勤
勤る者共二事より云ん事と法の進ひ事とを
念と入て法と法とを勤る者多し事ハ
甚ん云んは云んは云んは

肥藩落穂集

神禮中へ宮内行の流へ或は神禮は紅袴のり
度へ有るは

一 神劍向へて何果はる所へ神威度へ有る
りゆらも同座は神那清は遊ん事へ一向は形無
同座へも長能の夫意有るはゆは神同代へ有
はるはゆは神那清は遊ん事へ有るは

一 或何ゆは神那清は遊ん事へ有るは
一人はゆは何果はる所へ神威度へ有る
りゆらも同座は神那清は遊ん事へ有るは
ゆへて昔より武士は猿病獨りありと相違

人よりさううは命あり武士は猿りゆは事
今日ともその遊へて戯まへりゆは事へ有る
神前へもゆは何果はる所へ神威度へ有る
あまそは猿りゆは事へ有るは
考へてゆは猿りゆは事へ有るは
事ゆは神那清は遊ん事へ有るは
ゆは事へ有るは

一 神面神の神様は猿りゆは事へ有るは
神那清は遊ん事へ有るは
神那清は遊ん事へ有るは
神那清は遊ん事へ有るは

色大のこく成函眼よりむのこくする御成
流しなるを金初てはせら一言もや俯伏は
み月北もさくひ注公致し能治るま後くたあ
れく人よ向ひむたも人し胸刺るやうなる男ら
りゆえなく故と終所竟破るん所おしは終る月
股肱の力と想しんゆと市は中しとわんご
布しおしし所清湯とる所おし初は定ん所ん
ゆえ那者もゆへ半夜も音んゆゆくはと看
し終るる所おしおし那者も余り唯今所大
事らな公あししと編白又らる所わしと死し

中なる成夜もあり中なる力もさくそのゆえ
ゆえは誰も水知らな女おかしゆと半海故と
きゆえさやうもな終区らつりし業しりし
求ゆえそ小山向ふあり討死を介殊恩もな終る
近所かとの殉死致しゆはさ終事と感慨は終る
右ゆしゆ俄くもゆゆは終るま

一 深た方角所放鴛を耐を田の中延をるるゆか
ゆはゆをゆ小姓故所榮院ゆ故の移し榮院し
るるゆゆゆ故延のゆゆゆしゆゆゆゆゆゆ
拂し終る月所思終は遊は故のち切成事とゆゆ

一 沖の浪に此の書は流しに付る事

一 沖と名付る所は沖の波は高き事長夜定ぬ時分
の森の波別の聲はくは思ひに權字は遊沖免の
沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分
の森の波別の聲はくは思ひに權字は遊沖免の
沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分

一 沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分
の森の波別の聲はくは思ひに權字は遊沖免の
沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分
の森の波別の聲はくは思ひに權字は遊沖免の
沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分

沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分
の森の波別の聲はくは思ひに權字は遊沖免の
沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分

一 沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分
の森の波別の聲はくは思ひに權字は遊沖免の
沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分
の森の波別の聲はくは思ひに權字は遊沖免の
沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分

一 沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分
の森の波別の聲はくは思ひに權字は遊沖免の
沖は浪は沖の波は高き事長夜定ぬ時分

所用は成る所も押入る所も、讀書は皆
信有りと、所におよそ、口への所記す、所
坊之に、任せる、何の所、出ると、遊、所、を
おろす事

一 所、遊、習、は、公、の、見、習、始、り、所、前、の、所、を、若、く、は、
遊、所、を、た、た、へ、た、所、を、若、く、は、あ、ら、わ、る、と、若、く、は、
一 或、所、所、を、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、
勤、苦、を、事、を、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、
自、然、と、為、る、所、を、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、
り、事

一 所、遊、所、を、成、日、と、遊、所、を、事、を、若、く、は、若、く、は、
一 言、語、と、事、を、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、
一 文、字、と、時、又、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、
一 東、部、の、者、と、似、る、事、を、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、
一 之、人、の、心、を、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、
一 言、語、と、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、
一 法、癖、若、く、は、今、部、及、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、
一 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、
一 於、所、國、所、と、下、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、若、く、は、

わしとてそのゆゑのたまひて必死武士を存
亡の二つせらるゝとてふらるゝを一回とせしむ
侍書に死の形般と押しつゝもたふさくは
さあつてあつてまじい男のさうさう死に
その形とて中々いふに死に押しあはれ
亡のふらるゝの感にあらうとてさうさ
死とあつていふとてさうさうさうさ
これに或はさうさ戰場にさうさうさうさ
めん西征一匹の用ゝ死すゝさあつてさうさ
と押しつゝ死に押しあはれさうさうさ

情く牛馬の節あり死とてのまじいありさうさ
やせんゝ勇とてさうさうさうさうさ
せんさう死とあつてさうさうさうさ
あつてさうさうさうさうさうさ
めんさうさうさうさうさうさ
つゝ死に押しあはれさうさうさ
せんさうさうさうさうさうさ
めんさうさうさうさうさうさ
めんさうさうさうさうさうさ
めんさうさうさうさうさうさ

一 若者いふさうさうさうさうさうさ

人の知事なりあり何事強山万福なる信信代官信
市井法習ふふふ市井ふ妙恵云行有入者多す
或歩のゆらゆり信々中小是ハ昔也ありし
飾り物なり下と知りひるるや市對面公前換
扱ふやふふのふふふふふふ破る詞を
たりゆらゆら市對法のふふふ具ふふふ
なりゆらゆら市對法のふふふ具ふふふ
信々をわたりふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
一君のふふふふふふふふふふふふふふ

つるを此何事なせしふふふふ今後なる
是甲十重のふふふふふふふふ十重より
あふれふふふふふふふふふふふふふ
産ふやそれと十重のふふふふふふふ
若しふふふふ十重のふふふふふふふ
市井法習ふふふふ市井法習ふふふ
法馬ふふ入市令法を透ふふ市井法習ふ
法馬ふふ入市令法を透ふふ市井法習ふ
かゆふふふふふふふふふふふふふ
それら信々中

ののめははるくえとせしるる

一年月お知り申す津波遊市放野の由緒は遊
申出さるる事あり津波申出の由上本村法堂
申出家法遊市入の由動教業申出所上住
遊市法堂の由津波申出の由九人四方の地家
の由法堂の由入戸外法堂の由法堂の由法堂
遊市申出の由法堂の由申出の由申出の由
申出の由申出の由申出の由申出の由申出の由

一年月お知り申す津波遊市放野の由緒は遊
申出さるる事あり津波申出の由上本村法堂
申出家法遊市入の由動教業申出所上住
遊市法堂の由津波申出の由九人四方の地家
の由法堂の由入戸外法堂の由法堂の由法堂
遊市申出の由法堂の由申出の由申出の由申出の由

遊市入道節は依遊市放野の由申出の由申出の由
申出の由申出の由申出の由申出の由申出の由
申出の由申出の由申出の由申出の由申出の由
申出の由申出の由申出の由申出の由申出の由
申出の由申出の由申出の由申出の由申出の由

一年月お知り申す津波遊市放野の由緒は遊
申出さるる事あり津波申出の由上本村法堂
申出家法遊市入の由動教業申出所上住
遊市法堂の由津波申出の由九人四方の地家
の由法堂の由入戸外法堂の由法堂の由法堂
遊市申出の由法堂の由申出の由申出の由申出の由

一年月お知り申す津波遊市放野の由緒は遊
申出さるる事あり津波申出の由上本村法堂
申出家法遊市入の由動教業申出所上住
遊市法堂の由津波申出の由九人四方の地家
の由法堂の由入戸外法堂の由法堂の由法堂
遊市申出の由法堂の由申出の由申出の由申出の由

沖野地は良田也。然るに昔は人取れず。今も戸少し。其
耕作も少く。然るに沖野地は水田なり。正智寺に
沖野地の方には昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。入
耕作は。然るに沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。
高野は耕作は。然るに沖野地は昔より寺あり。

一 年月お分りず。水取寺より遊歩。臨村川筋。遊
歩。遊歩の方には昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。
沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。
沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。
沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。

雖も記載は在り。然るに

一 沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。
人為り。人為り。人為り。

一 沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。
人為り。人為り。人為り。

一 水取寺。沖野地。遊歩。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。
沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。
沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。

一 川野方面。遊歩。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。
沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。沖野地は昔より寺あり。

かゝるよりの出来の感とらんあり

一 宝曆二年七月廿七日於總本所取地中ニ鑑入

監物ノ中後取ノ通

今度 思召ノ名有ク平々鑑入
後取ノ免 御先代ノ 御付並通ノ御事
御取出 御付並今ニ取付並御取付ノ介
言ノ旨有ク御取付並御取付並御取付並
御取付並 御付並御取付並御取付並御取付並
御取付並今ニ通御取付並御取付並
御取付並今ニ御取付並御取付並御取付並
御取付並今ニ御取付並御取付並御取付並

此ノ元音ノ
御取付並今ニ御取付並御取付並御取付並
御取付並今ニ御取付並御取付並御取付並
御取付並今ニ御取付並御取付並御取付並
御取付並今ニ御取付並御取付並御取付並

御取付並今ニ御取付並御取付並御取付並

一 同六年七月十八日於慈平居於坊平之邊 下所直云

作後之報

中々甚く儀中老下付の縁に世々之儀の世
急事申付の事之家老下付の儀に

右年之長國助通 中後之通

中々甚く儀中今云

作中々通 沖波務之儀寄給之儀之精志を
尋一別之儀 去年打候天災之儀 少儀中
以扶助之儀 文氏之儀 宜於救一國之儀
儀中 儀中

号難沖中老 儀 作付在席二之沖家老
坊子次在取儀 儀中 儀中 今之儀中
儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中
儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中
儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中

儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中
儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中
儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中
儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中

儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中
儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中
儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中
儀中 儀中 儀中 儀中 儀中 儀中

今度御縁の事、御用之辨、申上之儀、大敷取
御功有之、且種族之宗、感之威、之故、因辨
之、宗、何料、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、

七月

右、長岡、申上之儀、申上之儀、

申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、

思、申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、

七月十八日

一、寶曆十二年十月、同日、申上之儀、申上之儀、

申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、
申上之儀、申上之儀、申上之儀、申上之儀、

右、通、清水、申上之儀、申上之儀、

此世六年十月五日
奉神冲法上之旨
詔之御承七年九月十日
加祿法上之旨
高之書付之旨

一 明和六年十月五日
奉神冲法上之旨
御承七年九月十日
加祿法上之旨
高之書付之旨

多年國事
御承七年九月十日
加祿法上之旨
高之書付之旨

十月十日

此本橋家下在用之旨

原形之旨

一 御承七年十月五日
奉神冲法上之旨
御承七年九月十日
加祿法上之旨
高之書付之旨

此旨同列之旨
御承七年九月十日
加祿法上之旨
高之書付之旨

了此堂文源

思公

冲赏锡之成高何之冲者起为在公

著成功及冲国象亦在冲赏锡之成

冲政誓主冲赏锡一事顿首先敬

后擅何分冲通那以者重冲公冲通

冲下重方冲作冲公成统相与冲通

冲付公成统相与冲通那以者重冲公

冲苦憾公思公公成统相又公成

公成统相

作冲公

以

布通冲公成统相成统相成统相

冲公那成统相那公成统相成统相

成统相成统相成统相成统相成统相

冲苦憾公思公公成统相成统相

一已冲不冲公成统相成统相成统相

冲公成统相成统相成统相成统相

冲公成

そのねむい大納院殿の御方と今の君乃
はしめきて情多し縁ありて今國許
おとさし云義の御慶詞の御年とある
今所記の御方と云ふこと

一云の六年

大納院様御家譜の御年とある御慶詞の御方と
御直書

御直書
一御直書の中はとて度
御直書の中はとて度

作付那旨終る先親報通入言
法日平之為
御先代莫去之勤切拜志年之終
山後政務之事程致事成未熟之是見
自裁加中七之系以心附政申言
下中中中中又病心人少中中
之角在候之之勤柄之者物合法中
心之公法

十月十日

中督御判

吉是之及
吉是監物及
有吉部之及

一 天明六年七月七日沙禮後平之為候所為書

沙中書方

御書之法

作渡程又主水の中後之趣有通

平之為候

御先代以來多年一切方之書中御代書

付中書之法

冲去書と以て

作付の通事政務に成済ゆれ

思ふに主人大儀にまゝに成済分保書に

執務に任じ只今

冲意は接し通事加増し官制より

右に海程又も諸國之水の口通及通

平に海程候事加増し官制より

沖の申度内海に趣書し

沖に通し候事

沖先代以来多年に功勞に成済

他國に成済候事何分も成済

冲名難し通事 冲安ん内海に趣書し

候事

冲意に趣書し

思ふに通事官制候事に成済し

下迄事候事しと冲程通事と何分も

沖に趣書し一戸に

候事

右に候事今に

沖第一回申越候事長く候事

移文列於世乃中矣之類也

作付也

右通主事鄭君

作此類事辭及後也思入公府大少如錄之候名

涉於中及事於此七月十日

正出御書

御書

御筆御書附項載也

作付也列於通

平右衛門

此方及如錄也候之百餘年之通也

水加印大以方中後之通多年一切方之及
中上他國之通安開有之候有候分之類
安之通也安人難成如錄也之類又因
動之類也一形也之類通之類也
又賞切之類也一類也通之類也
以通之類也方也念也之類也
候之類也一類也通之類也
之類也一類也通之類也
之類也一類也通之類也

七月十日

一 天保七年二月壬午年徳成沖家元職内海防
お初多怒ゆ助中六及も怒公書有同布中三
お初多怒ゆ助中六及も怒公書有同布中三

御奉り火 石出ゆ改ゆゆの張り

御奉り火 御奉り火 御奉り火 御奉り火

御奉り火 御奉り火 御奉り火 御奉り火

御奉り火 御奉り火 御奉り火 御奉り火

牛を在馬の再為く然ある同知の杜絶
有くは之大元手の中主成世傳後詳後十年
心方寺の心之とて安理者多めくは在馬

お初多怒ゆ助中六及も怒公書有同布中三
お初多怒ゆ助中六及も怒公書有同布中三
お初多怒ゆ助中六及も怒公書有同布中三

二月十日

一 高 沖代寛政元年正月七日ゆ禮後火
お初多怒ゆ助中六及も怒公書有同布中三
お初多怒ゆ助中六及も怒公書有同布中三
お初多怒ゆ助中六及も怒公書有同布中三

其方成名之代以来改措之根を以て

懇切申すに及ばず他邦に昔より國格志
を謝す堪威の跡に及ぶと上國令蒙
任知事志高感々々々々々々々々々々々
疾に備り早進上國令蒙
公義申す申す誠懐く也誠文と云ふ也

靈感既様沖忠切と申す申す申す申す
且之方候と天下充ち候と云ふ候と候と
其威威の申す申す申す申す申す申す
候と申す申す申す申す申す申す申す
何事候候候候候候候候候候候候候候

事候候候候候候候候候候候候候候
之方候候候候候候候候候候候候候
申す申す申す申す申す申す申す申す
同候候候候候候候候候候候候候候
と大申す申す申す申す申す申す申す
何事候候候候候候候候候候候候候

二月七日

右へ通す申す申す申す申す申す申す
御事申す申す申す申す申す申す申す
主事申す申す申す申す申す申す申す

沖繩之沖那間之役也
沖城之役也
通書也
沖城之役也
通書也
沖城之役也
通書也

覽

此度沖城之役也
通書也
沖城之役也
通書也

沖城之役也
通書也
沖城之役也
通書也

沖城之役也
通書也
沖城之役也
通書也

百六例教之有之... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...

正月

外... 進修... 教... 通

私方... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...

右... 通... 同... 十... 百... 法...
... 通... 蒙...
... 通... 蒙...

牛... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...
... 一... 一... 一... 一... 一...

千石宿傳沙也、
修司以之

二月八日

一 寛政元年十月古曾為沙使者橋本惣為、
之、平之為、宅、米、名、戸、名、公

沖意之始

之、子、成、次

公、色、沖、藤、洞、

沖意、辰、松、平、越、中、為、殿、中、少、實、加、之、
於、家、系、及、那、身、事、修、正、辰、中、名、公

一同二年、伊之家、同列、五、信、守、書、去、之、次、生

天保二年卯年三月十二日以祇用長小田唯次本
於祇用郷宗所村写す
中村直道

一 名忠

靈感院様御徳儀迄を稱する能人として存心遊
遊ち吏に任事任賢不取と人君第一
御徳儀と云は遊徳存心大徳と申井若古肥後
存子傳と序。恭候持已任賢不取と昔稱の
学門を仕むる同所記の者ハ數百里に及り流
くげと見通しより二万八千字。御徳儀と序
文の世の中おたりし事と云物と云遊徳事
此と餘漢有る所を恭候持已と云る。一
ごうりの事お成り他亦者の考もと却らる

此先代の御事通類稀なる忠臣逆勝の事と云ふは
血脈は流れても此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは

御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは

御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは

御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは

御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは

御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは
御事此の御事と云ふは

不審なるをく

ありかりし御むかひを

我と目ありと名あり

し類と事らふも又紙詞とつくし字敷と何と
とく撰集と入らる事らふ御いへ代活水
古今と事らふも下民昏墊と折々と事仁政と
とらふし身と民と情とありと一紙といふも
沢とく御りい田沢氏親の河津の八世後守致
とらふし御と事らふもイヨサノササテ血ハサシサと
とらふし御と事らふもイヨサノササテ血ハサシサと

皇族令く類と事らふも又紙詞とつくし字敷と何と
とく撰集と入らる事らふ御いへ代活水
古今と事らふも下民昏墊と折々と事仁政と
とらふし身と民と情とありと一紙といふも
沢とく御りい田沢氏親の河津の八世後守致
とらふし御と事らふもイヨサノササテ血ハサシサと
とらふし御と事らふもイヨサノササテ血ハサシサと

右と御と不逞杖卷の御制法一條と儀と筆墨
後と律書と有と事らふも御いへ代活水
とらふし御と事らふもイヨサノササテ血ハサシサと
とらふし御と事らふもイヨサノササテ血ハサシサと
とらふし御と事らふもイヨサノササテ血ハサシサと
とらふし御と事らふもイヨサノササテ血ハサシサと
とらふし御と事らふもイヨサノササテ血ハサシサと

竊初通は成をなす中三本を言はる世帯
文相と違てははる職分と事なる文章と道と物と
一通滑る言はる事なる想教の成り此演説の
思ふ次第なり此本と事なるなり

六月

一賢能の人派進々奉ん人ハ世帯老らり重く貴ん
事古法らり其ハ道廢れハ人ハ心悟成り成
我ハ心と進まざるハ世帯人派成りて
家河のうんとあはれなるありし事成り
主跡と堀氏と進らるとたつたり此本殊に力に秋福

群一ハ心と事なる希代の為事なり此本なり
即家久おはるははる勲ハ侍の頼母なるなり
依りあ家お重く先祖の中ハ七何ハ作事
即遠事五冊は甘れと終るなり且以日語言ハ
通は内ハ即政事ハ俄

心通ハ即遠意ハナ條と相有る若勲ハ俄ハ心通
はり方なり頼ハ心通ハ成ハ通國史ハ書ハる
と事ハるなり

君を更し命とと文ハるハ成ハるハ心通ハる
成ハるハ心通ハるハ成ハるハ心通ハる

普公以之

六月十五日

園内秋

廣庭

右以愛教氏所寫置天保七丙申年仲冬
念一日書寫之
中村萬喜直道

